



高知新聞(夕刊) 2008年7月24日

となりのニューヨーク ー木曜の夜は……ー

ニューヨークに住む写真家やアーティストが、木曜日の夜によくすることがあります。それはギャラリーめぐりです。

マンハッタンの西側の、十四丁目から三十一丁目のエリアは、チェルシーと呼ばれる地区で、特に九番街から十一番街の間は”犬も歩けばアートギャラリーにあたる”というような場所です。

こぢんまりとしたギャラリーから、元は倉庫だった建物を改築した大きなものまでいろいろあり、写真専門、絵や彫刻専門、大きな作品専門、新しいアーティストの作品を見せる所、などなど、ギャラリーによってそれぞれ特徴があります。ギャラリービジネス業界では、このチェルシーに店舗をかまえることが、ひとつのステータスになっているようです。

たいていのオープニングパーティーは、なぜか木曜日の夜に行われます。夜八時ごろになると、チェルシーのいろんな場所が人でごったがえしてきます。オープニングパーティーでは、多くのギャラリーは、ワインとビール、そして、チーズや野菜などの簡単な食べ物を無料で振る舞います。

以前行ったあるギャラリーでは、オープニングのために、イケメンのバーテンダーを二人雇い、バーコーナーを用意していました。ジントニックを注文したら、やはり無料で作ってくれました。実は、ただで飲み放題、を目当てにオープニングに通っている、というニューヨーカーもいるくらいです。

そこまでするからには、ギャラリー側は、作品の販売にしっかり力を入れます。そして、作品の売り上げの、40%から50%がギャラリーの利益になるのです。

皆、グラスを片手に、芸術作品の前で話の花が咲きます。このオープニングめぐりは、アーティストたちにとって、大事な社交の場になっています。他のアーティストと久々に会ったり新しく出会って、情報交換したり、ギャラリーのディレクターと話して、自分の作品を見てもらうアポをとったり、といった感じです。

このオープニング、普段着で行くのが、ニューヨーク流のおしゃれ、なんだそうです。